

真長寺本十二天像の図像比較及び復元研究

愛知県立芸術大学 非常勤講師 阪野 智啓

1. 真長寺本十二天像の周辺

◇真長寺本十二天像

本研究で取り上げる「十二天像」（以降真長寺本）は、十二天で一具とする図像のうち、当初のものは四幅しか現存せず、現在では当初以外の八幅は江戸時代の別系統の像が充てられ、像容が不整合となっている。しかし当初四幅は、国指定重要文化財の滋賀県西明寺蔵「十二天像」（以降西明寺本）と図像的に近似しており、明快な色彩と肥瘦の強い線描、面貌の繊細な描写など、筆法に優れた秀作である。またこれまでの調査により、西明寺本を中心に立像十二天像のひとつの系統があることを確認できた。そこで本研究では、西明寺系十二天像の図様変遷を比較・検証し、技法や図像的特長を整理することをひとつの目的とし、また真長寺本欠損八幅の図像復元を試み、十二幅の全容を白描画で起こしていくことも試みる。



●十二天像のうち月天、日天、風天、閻魔天（岐阜・真長寺）

2. 西明寺系図像

◇西明寺系の立像十二天

西明寺本と図像の近似する立像十二天像は、真長寺本、正覚院本、大阪市立美術館本、宝珠院本がある。

西明寺類似本系統の像容の特徴は、東寺本や、聖衆来迎寺本との相違点から見ると次のようになる。

- ・月天が右斜めに構え、両手で蓮華座月輪の茎を捧げ持つ
- ・風天が右を向き、天衣が向かって左上で翻り輪をくぐる
- ・帝釈天が独鈷杵しか持たず、左斜めを向き、袈裟を着ける
- ・日天は東寺本とほぼ同図像だが、月天と共に踏割蓮華座に立つ
- ・水天は聖衆来迎寺本と立ち姿が一緒だが、宝剣を握りしめる
- ・火天は聖衆来迎寺本にやや近いが、右手第一手や火焰を異にする

●西明寺本（月天、日天、風天、閻魔天）



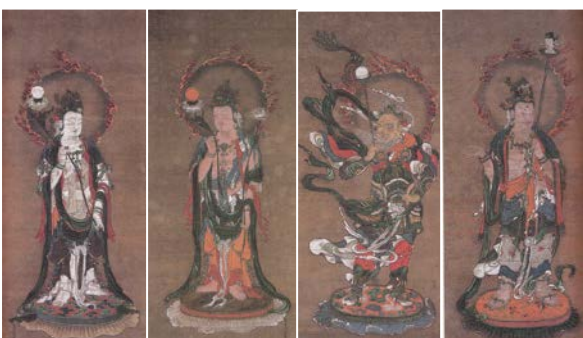
滋賀県西明寺に伝来し、重要文化財指定される。容姿は南宋画の影響を伺わせ、また硬質な筆致と謹直な文様表現に特徴がある。

●大阪市美本（月天、日天、風天、閻魔天）



もと東楽寺に伝来した十二天像で、やや大振りな図像を持ち筆致もおおらかで動勢を感じる。虚空表現が濃い褐色で、面貌も黒目勝ちでアクが強い。

●正覚院本（月天、日天、風天、閻魔天）



正覚本は長谷川等伯の能登時代に描かれたもので、仏画にしては珍しく落款が認められる。濃い賦彩の割に色合いは淡く、静穏さを感じる図像となっている。

●宝珠院本（月天、日天、風天、閻魔天）



名古屋市の宝珠院に伝わる図像で、粗絹に描かれた室町時代の制作と考えられる。彩色は浅いが、像容は種字の有無を除けば大阪市美本と一致する。

3. 西明寺系の比較

◇相違する西明寺本

	帝釈天	火天	閻魔天	羅刹天	水天	風天	毘沙門	伊舎那	梵天	地天	日天	月天
西明寺本	ト-4	シ-78	ト-2	ト	シ-2	サ	ト-2	シ-2	ト	ト	ト-5	サ
真長寺本	欠損	欠損	ト-2※	欠損	欠損	サ	欠損	欠損	欠損	欠損	ト-5※	サ※
正覚院本	ト-49	ト-47	ト-2※	ト-8	シ-2	サ-8	ト-2※	シ-2	ト	ト※	ト※	サ※-5
大阪市美本	ト-49	ト-78	ト-2※	ト-8	シ-2	サ	ト-2※	シ-2	ト-5	ト※	ト-5※	サ※
宝珠院本	ト-49	ト-78	ト-2※	ト-8	シ-2	サ	ト-2※	シ-2	ト-5	ト※	ト-5※	サ※

ト=東寺、シ=聖衆来迎寺、サ=西明寺

- 1 : 衣の翻り - 2 : 天衣の掛け方 - 3 : 足の形 - 4 : 持物の形 - 5 : 座の形

- 6 : 顔の向き - 7 : 腕の動き - 8 : 髪形 - 9 : 宝冠

西明寺類似本を詳細に比較すると、上掲の表のように西明寺本の図様のみが異なる様相を呈していることになる。大阪市美本と宝珠院本は全尊像が一致するため、西明寺本がやや異質な存在になる。西明寺本は、何らかの事情で注文主から像容の改変を求められ、一部は古様に寄せて変容した図像とも考えられる。よって西明寺系像容の基本形態は、西明寺本ではなく大阪市美本や宝珠院本に近いものと推測される。

4. 真長寺本想定復元

◇西明寺本系統の像容

- ① 月天が右斜めに構え、両手で蓮華座月輪の茎を捧げ持つ
- ② 風天が右を向き、天衣が向かって左上で翻り輪をくぐる
- ③ 帝釈天が独鈷杵しか持たず、左斜めを向き袈裟を着け、角冠を被らない
- ④ 日天が、月天と共に踏割蓮華座に立つ
- ⑤ 水天は聖衆来迎寺本と立ち姿が一緒だが、宝剣を握りしめる
- ⑥ 火天は東寺様に近い像容をとるが、火焰光が毛氈座を包まない
- ⑦ 羅刹天の頭髮は炎髪ではなく鬘を結う
- ⑧ 梵天が荷葉座に立つ
- ⑨ 毘沙門天の天衣が右肩にしか掛からない
- ⑩ 天冠帯が腰のあたりで左右に広がらない

◇白描復元

真長寺本の想定復元での図像的特徴は大阪市美本や宝珠院本に準拠した。ただし、真長寺本の一つ端正な容姿は西明寺本に通じるところがあり、図像のベースは西明寺本とし、細部描写を逐次、正調西明寺系図像に変える手法を取った。西明寺本系統でも現存最古であろう真長寺本の像容はより粉本に近い図像の可能性があり、図像の変遷を辿る上で希少な存在であり、岐阜県や北陸に残る十二天像を基点に、地域性など新たな視点が見いだせないか調査を期したい。

—真長寺本想定復元—

◇帝釈天（白描復元）



西明寺本からの変更点

- ・角冠 ⇒ 天冠

◇火天（白描復元）



西明寺本からの変更点

- ・右手第一手（三角印）⇒ 笹杖
- ・右手第二手（念珠）⇒ 水瓶
- ・左手第一手（笹杖）⇒ 施無畏印
- ・左手第二手（水瓶）⇒ 念珠

◇羅刹天（白描復元）



西明寺本からの変更点

- ・炎髪 ⇒ 天冠、鬚
- ・甲冑の意

◇水天（白描復元）



西明寺本からの変更点

- ・毛氈座の髷

◇毘沙門天（白描復元）



西明寺本からの変更点

- ・衣の掛け方

◇伊舎那天（白描復元）



西明寺本からの変更点

◇梵天（白描復元）



西明寺本からの変更点

- ・毛氈座 ⇒ 荷葉座

◇地天（白描復元）



西明寺本からの変更点

- ・天冠帯が左右に広がらない